

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 書評

山岡洋一

一 永遠の良書 — J.S.ミル著村井章子訳『ミル自伝』（みすず書房）

19世紀のイギリスを代表する思想家、J.S.ミルの自伝は長く読みつがれてきた名著だ。有名な早期教育の話など、読みごたえのある話がいくつもつまっている。

■ 古典翻訳塾の報告

山岡洋一

一 『ミル自伝』翻訳の経緯

今回みすず書房から出版された J.S.ミル著村井章子訳『ミル自伝』は、「翻訳通信」から生まれたものである。経緯を簡単に報告する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

（@は半角文字に変えてください）

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

永遠の良書

— J.S. ミル著村井章子訳『ミル自伝』（みすず書房）

たぶん、ある年齢以上の人にとって、『ミル自伝』といえば、高校生か大学生のときに当然読んでおくべき本のひとつだったはずだ。たいていは岩波文庫で読んでいと思う。岩波文庫で発行された2種類の翻訳のうち、昭和初めの1928年に発行された西本正美訳で読んだのであれば幸いだが、1960年に発行された朱牟田夏雄訳で読んでいけば、かなり苦労したのではないだろうか。

朱牟田夏雄といえば、東京大学文学部英文科の主任教授だった英文学者だ。この種の翻訳では最高権威といってもいい学者なのだが、少なくともこの本に関するかぎり、権威にふさわしい実力を発揮していなかったのではないかと思える。その点については、「翻訳通信」の2006年5月号（第2期48号）から同9月号（第2期52号）にかけて、「ミル自伝を訳す」と題した連載である程度指摘したので、今回は繰り返さない。

また、以下の「古典翻訳塾の報告」に記すように、今回の村井章子訳はこの「翻訳通信」から生まれたという事情があるので、翻訳の質を批評するのも若干気が引ける。そこで、以下では『ミル自伝』という本について、いくつかの点を書いていきたい。

☆ ☆ ☆

19世紀のイギリスを代表する思想家というと、真っ先にあげられるのがおそらく、ジョン・スチュアート・ミルだろう。ミルに対抗できる人がいるとすれば、チャールズ・ダーウィンらごく少数しか思い浮かばない。それほどの思想家だし、哲学の『論理学体系』や『功利主義論』、経済学の『経済学原理』、政治学の『自由論』や『代議政治論』など、幅広い分野で優れた著作を残しているのだが、それにしても、少なくとも現在の日本で、それほど人気があるわけではないように思える。

なぜなのかを考えると、翻訳という立場でまず思い浮かぶのが、ミルが代表しているとされる思想

につけられた訳語だ。ミルは、「イギリス経験論」を代表する「功利主義」の思想家だとされている。

「経験論」は empiricism の訳語、「功利主義」は utilitarianism の訳語だが、どちらも原語ではともかく、日本語で読むと、何とも冴えない印象を受ける。「経験」とはそもそも狭くて、底が浅く、普遍性をもたないものだし、「功利」にいたっては打算を連想させる非難の言葉ではないか。「経験」や「功利」に魅力を感じる人がいれば、よほど言語感覚が鈍いに違いない。

いまとなつては、「経験論」「功利主義」という訳語を変えるのは極端に難しくなっているが、少なくとも、この訳語から連想されるものとはまったく違った考え方であることは認識しておくべきだと思う。そして、経験論も功利主義もはるか昔の変わった理論などではなく、いまでは意識もされないほどの常識になっていることを認識しておくべきだと思う。

たとえばいま、J.S.ミルの『経済学原理』を読みたいという人はそう多くないだろうが（「定常状態」、つまり経済の成長と人口の増加が止まったときに社会がどうなるかを扱った第4編第6章のためだけでも全体を読む価値はあると思うが）、この本はスミスとリカードを受け継いで、19世紀後半に主流のなかの主流になっていた。経験論と功利主義に基づくミルの経済理論を継承して、20世紀初めの主流になったのがマーシャルの経済学だ。マーシャルの弟子のひとりがケインズであり、ミルとマーシャルの経済理論を批判的に継承して、新たな経済理論を築きあげた。ケインズ経済学を批判したシカゴ学派も、ミルとマーシャルの理論を継承している。したがっていまでは、経験論と功利主義に基づくミルの経済学を肯定的にしる批判的にしる継承していない経済理論はそれほど多くないといえるほどである。どのような思想にも影響されることなく、現実の経済問題に取り組んでいると自負する実務家も、150年近く前に死んだミルの影響を受けているといえるはずだ。優れた思想の力は、それほど強いのである。

経済学だけではない。政治学や倫理学でも、ミルの功利主義の理論は影響力をもちつづけている。たとえば、現代のアメリカで強い影響力をもつ自由意思論（リバタリアニズム）はミルの『自由論』を源流のひとつとしているし、現代の倫理学の古典といえるロールズの『正義論』は功利主義批判を出発点としている。19世紀イギリスで、ここまでの影響力をもっている思想家は、それほどいないはずである。

☆ ☆ ☆

そのミルが残した自伝だから、本書が長く読みつがれてきたのは不思議でも何でもない。

『ミル自伝』でとくに有名な部分はおそらく、第1章の早期教育の部分だろう。ミルは功利主義思想家として有名なジェームズ・ミルの長男として、1806年に生まれた。父親は自らの思想に基づいて理想的な教育を施そうとしたという。

なにしろ、3歳になるとすぐにギリシャ語を学びはじめ、7歳のときにはプラトンの『対話編』を読み、英語で書かれた歴史書も次々に読んだというのだ。8歳になるとラテン語を学び、12歳からはアリストテレスの『オルガノン』をはじめとする論理学を学んだ。さらに父親に経済学の手ほどきを受けた後、リカードの『経済学と課税の原理』、アダム・スミスの『国富論』を読んでいる。そのうえ、父親の親友だったリカードの自宅に招かれ、散歩しながらたくさんのお話を教えてもらったというのだから、何とも贅沢だ。

この早期教育の話だけでも、『ミル自伝』は読む価値があるが、それだけではない。訳書で300ページ足らずのなかに、読みごたえのある話がいくつもつまっている。

まず驚くのは、父親のジェームズ・ミルという人物だ。いまではたぶん、J.S.ミルの父親、ベンサムBenjaminの盟友という点以外で話題になることはあまりないだろうし、著書が話題になることもまずない。だが、『ミル自伝』を読むと、とてつもない人物であったことが分かる。ベンサムの思想を認め、イギリス国内で広めたのはジェームズ・ミルだし、リカードに『経済学と課税の原理』を書くように説得したのも、ジェームズ・ミルだ。『ミル自伝』の記述には身びいきという面があるという見方もあったが、たとえ

ばリカードに関しては後に2人の間で交わされた書簡が発見され、リカード全集に収められている（[リバティ・ファンドのサイト](#)で全文が読める）。それを読むと、リカードが実はジェームズ・ミルの弟子のような関係にあったことが分かる。ジェームズ・ミルがリカードに与えた影響はかなり大きかったはずだと思う。

要するに、ジェームズ・ミルは19世紀初めから半ばにかけてのイギリスの巨人、3人の神輿をかついだ人物だったようなのだ。神輿に乗ったのは、まずはベンサムであり、つぎにリカードであり、もうひとりはいまでもなく、長男のJ.S.ミルだ。この3人がいまでも名前を知られているのはかなりの部分、ジェームズ・ミルのお陰だといってもいい。神輿に乗った人ももちろん、偉かったのだが、この3人の神輿をかついだジェームズ・ミルはとてつもない人物だったようなのだ。『ミル自伝』を読むと、ジェームズ・ミルがどのような人物だったか、その一端がみえてくる。

このような父親に幼少のころから一対一で教育を受けたJ.S.ミルが、青春に父親をどうみるようになったのかは興味深い点だろう。『ミル自伝』の第5章「精神の一大危機」はまさに、父親の教えとの葛藤の物語だ。誰でも経過する反抗期の記録なのだが、反抗する相手が相手だけに、苦しい戦いになったようだ。この危機を経て、J.S.ミルは自立した思想家に育っていくわけで、父親は意外に温かい目で息子の苦闘を見守っていたのではないだろうか。この部分は『ミル自伝』のハイライトのひとつであり、青春の記録として興味深い。

青春といえば、恋愛がつきものだが、『ミル自伝』にはメロドラマの原作になりそうな物語がある。25歳のときに友人の家に招かれ、その人の妻で23歳のハリエット・テイラーに出会う。その後、2人は長く苦しい恋を続けることになる。社会道徳上、許されない関係だったので、ミルは家族からも友人からも孤立したという。20年近くたって、ハリエットの夫が死亡し、その2年ほど後に2人は結婚する。だが、結婚生活は長くは続かず、妻は旅行先のフランスで急死する。

この『ミル自伝』は最愛の妻の記録を残したいという動機もあって書かれたようだ。知り合った後にミルが書いた著作はどれも、2人の協力の成果であり、妻から教えられた部分が多いとミルはいう。あ

まりに手放しの賛辞に鼻白むとする見方が一般的だったが、その後にミルとハリエットの往復書簡が発見され（残念ながら読んでいないが）、『ミル自伝』の記述が意外にもかなり正確であることが明らかになったという。

本書に一貫しているのは、私利私欲を離れて公共の利益を追求する精神である。功利主義といえど誰でも思い浮かぶのは、「最大多数の最大幸福」という言葉だ。「自分自身の最大幸福」ではない。「最大多数の最大幸福」なのだ。この点を少し考えてみるだけで、功利主義者のミルが個人の利益ではなく、公共の利益を追求していたことが分かるはずだ。万人の幸福を何よりも重視する精神、そうした精神が失われてきた現在、『ミル自伝』はとくに若者に読まれるべき本だと思う。

☆ ☆ ☆

最後に、本書を手にとったとき、凜とした美しさがとても印象的であることを是非とも指摘しておきたい。一切の無駄を省いた美しい本なのだ。表紙も美しいが、中も美しい。行間と字間、空白、フォントなどが見事だ。それに、解説がなく、訳者後書きもなく、凡例や年表といったあらずもがなもない。ミルが書いた本文を、本文だけを、この訳で読んでほしいという訳者と編集者の自信があらわれている。

出版物は美しくなければならない。美術本はもちろんだが、この『ミル自伝』のように文章だけの本であってもそういえる。美しくなければ、読んでみようという意欲が続かない。美しくなければ、愛読書にはならない。そして美しくなければ、電子媒体など、他のメディアとの競争に勝てるはずがない。

そしてもちろん、中身が大切だ。安直に作られた本ばかりがもてはやされ、著者や編集者には品格も矜持も邪魔なのかとすら思える昨今、ほんとうの意味で書かれた本は貴重だと思う。

J.S.ミルが自伝を書いていたころ、同じイギリスの思想家、ジョン・ラスキンが「ごまー王侯の宝庫について」と題する講演を行い、書物という隠れた宝庫を探究するよう勧めている（中央公論社『世界の名著 41』の木村正身訳「ごまとゆり」に収録されている）。ラスキンによれば、書物には一時の書物と永遠の書物がある。一時の書物とは、愉快的談話、有益な談話を印刷し、一度に何千人もの人に話しか

けられるように、著者の声を増幅したものにすぎない。だが、書物とは本来、こういうものではない。生涯をかけて見つけ出した真実の知識を永久に書き残すために、可能なら岩に刻んで残しておくために書かれたものだ。そうラスキンは語っている。

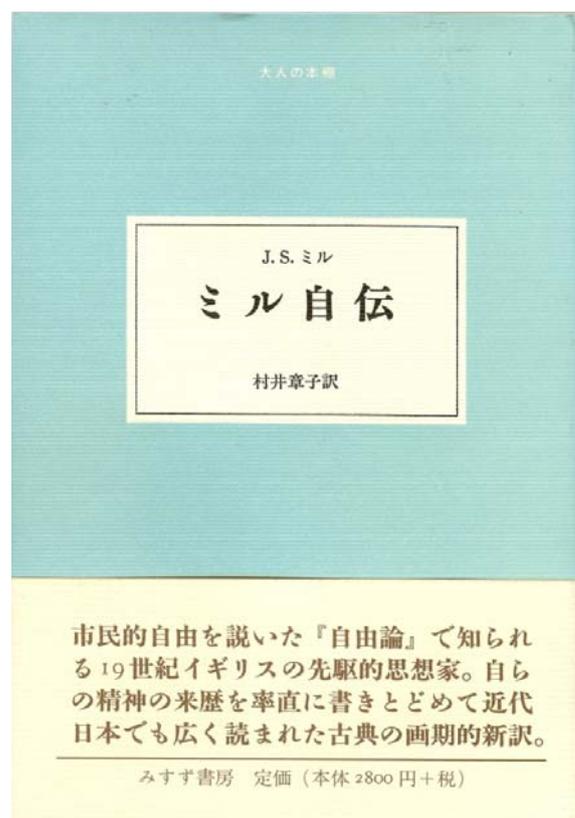
声をそのまま記録し増幅する方法がいくらでもある現在、一時の書物に貴重な時間を使う必要があるのだろうか。読むのであれば、永遠の書物、とくに永遠の良書にしたい。『ミル自伝』はそういう本のひとつだと思う。

『ミル自伝』の詳しい情報は以下を参照ください。

[みすず書房のサイト](#)

[アマゾン](#)

[紀伊国屋書店](#)



『ミル自伝』翻訳の経緯

今回みずす書房から出版された J.S.ミル著村井章子訳『ミル自伝』は、「翻訳通信」から生まれたものである。経緯を簡単に報告しておく。

翻訳者になりたいという人の数は多くても、すぐれた翻訳ができる翻訳者の数がまったく不足している現在、翻訳教育は大きなテーマのひとつだと思う。だが、翻訳教育には一筋縄ではいかない問題がある。

じつのところ、最大の問題は出版不況もあって、希望者が圧倒的に多い出版翻訳では生活費を稼ぐのが容易でないという点にある。会社勤めで考えにくいような高収入がえられる見込みがあれば、出版翻訳の世界は活況になり、競争が激しくなる。そのなかから本当に優れた翻訳者がつぎつぎに登場する状況になって、翻訳教育など不要になるかもしれない。出版不況が長引いているいまでも、出版翻訳と産業翻訳をうまく組み合わせれば、ある程度安定した収入は確保できるだろうが、そうしようとすると、別の問題が絡んでくる。

翻訳は年季が重要な仕事だ。基礎的な能力が高い人でも、翻訳を何年か続けなければ、職業として翻訳を続けられるほど、質を高めるのは容易ではないし、それ以上に、職業として成り立つほどのスピードを確保するのは容易ではない。大量の翻訳を行わなければ、質とスピードを高めるのが難しいのだ。このため、翻訳は参入障壁がかなり高いといえる。

こうした点を考えると、翻訳の演習を行い、問題点を指摘することで、教育効果をあげる余地があると思えるかもしれない。だが現実には、翻訳教育で受講者の実力を高めるのはそう簡単ではない。翻訳には外国語を読む力、日本語を書く力、原文の意味を理解する力が必要であり、どれも、翻訳に必要な能力を獲得するには年単位の学習が必要だからだ。翻訳を学ぼうと考える人ならたぶん、読書など、学習効果のあることを少なくとも 20 年は続けてきたはずだから、年単位の学習というのは極端に高い要求だとは思わない。だが、受講者が翻訳の学習をはじめる前にこれらの能力を十分に獲得していなければ、翻訳教育でできることは限られている。1 日 10 時間の学習を何年か続けられれば効果はあるだろう

が、そのような翻訳教育を行った例は、あまりないのではないだろうか。

結論としては、翻訳教育によって受講者の実力を高めるのは容易でないということになる。だが、じつのところ、これは翻訳に限ったことではない。自動車の運転のように簡単な技能であれば、教育と訓練によって実力を高めることができるが、高度な技術や芸術などでは教えることで受講者の実力を高めるのはそう簡単ではない。学校教育でいえば、高校までは教室で教えられることはかなり重要だが、大学になると授業の重要性は低くなり、大学院になると、教えられるまでもなく学ぶしかない部分が圧倒的に多くなるのではないだろうか。それでも、教育機関が成り立つのは、文字通りの教育以外に 3 つの機能があるからだと思う。

第 1 に、教育機関は同じ分野の学習者を集め、相互学習の機会を与えている。学校では、教師から学ぶよりも、先輩や同級生から学ぶことの方が多い場合もあるはずだ。

第 2 に、教師は学生の力を見抜き、最善の部分を伸ばすよう励ますことができる。また、実力のあるものを選び出すことができる。

第 3 に、教育機関には仕事を斡旋する機能がある。少なくとも、卒業資格を与えて、仕事を探しやすくする機能がある。

以上の機能は、公教育機関だけではなく、もっと私的な師弟関係にもある。教えるという機能をまったくもたない師弟関係すらある。たとえば将棋の世界では、プロの棋士になるには師匠が必要になっている。以前は住み込みの内弟子になるのが普通だったが、いまでは通いが通常ようだ。師匠が弟子と将棋を指すのは 2 回だけだといわれていた。1 回目は弟子入りを許すかどうか、実力を見極めるためである。2 回目はプロになるには実力が不足していると判断して故郷に返すときだ。棋譜を土産に田舎に帰れというのだそう。要するに師匠は教えないのが原則なわけだが、それでも師匠であるのは、第 1 に兄弟弟子と切磋琢磨する機会を与え、第 2 に実力

を評価し、第 3 にプロの棋士になる道を与えるからだ。

☆ ☆ ☆

翻訳教育でも同じことはいえるかもしれない。教えて受講生の実力を高めるのは難しくても、何人かの仲間で学びあう機会を与えることはできるし、受講者の実力を判断することもできる。若干問題があるのは、仕事を世話することだが、これも編集者の協力がえられれば可能だ。2005 年の後半にそういう協力がえられると見込める機会があった。そこで計画したのが、古典翻訳塾だ。

もっとも、優秀な受講者に生活に困らないだけの収入がある仕事を紹介することができないのであれば、本来なら翻訳教育など行うべきではないともいえる。この点は出版翻訳の現状では解決が難しいが、そうであれば、取り上げるテーマに魅力がなければならぬ。古典を訳すというのは十分に魅力があるテーマだと思えたので、古典翻訳塾と銘打ったのである。

古典翻訳塾はこの「翻訳通信」で参加者を募集し、2006 年初めに発足した。参加者の希望する分野は多岐にわたると予想されたので、当初はエッセー風のもので良いと考え、題材に選んだのが『ミル自伝』であった。参加者は短い文章を訳してもらって、その結果に基づいて決めた。選んだのは 7 名であり、事務所で無理なく議論できる人数ということで、この人数になった。結果として、ほぼ全員が翻訳を職業にしているか、翻訳実績のある人であった。

当初は週に 1 回、後には月に 2 回集まった。『ミル自伝』を 1 年で訳すことを目標にし、冒頭から少しずつ、集まる日の前日までに全員が訳して、電子メールで全員に送ることにした。主催者のわたしは訳さず、全員の訳文を読んで、問題点と良かった点を指摘するだけに止めた。集まりでは参加者が順番に進行係になり、全員で議論した。

岩波文庫の 2 種類の既訳と、それ以外の既訳は当然ながら全員が買って参照した。議論していくうちに、既訳の問題点が明らかになり、権威ある既訳をこわがることもなくなっていった。J.S.ミルの原文は 19 世紀に書かれたものだけに、挿入の多い長いセンテンスが特徴だが、しばらくするとそれにも慣れて、構文をみなで議論しなければならないことは

減っていった。それ以上に問題だったのは、宗教論や哲学に関する部分だが、哲学にくわしい参加者がいたので、幸運だった。

当初、『ミル自伝』は教材と考えていたのだが、しばらく続けていくうちに、練習だけではもったいないと感じるようになった。すばらしい名著だし、参加者の翻訳の質が高く、既訳よりかなり良い訳ができると思えるようになってきたからだ。数か月たつと、7 人の参加者のうち 1 人の訳を出版することを明確な目標にするようになった。各人の訳にはそれぞれ特徴があり、それぞれに違った面で魅力があったので、誰の訳を選ぶのかは大きな問題だった。また、1 年で全編を訳すのは少々無理な状況になり、一部は全員で訳すのではなく、1 人が訳したものを全員でチェックし、議論する方法をとらざるをえなくなった。こうして、ほぼ全員の意見と本人の希望で、村井章子さんが出版用の原稿を仕上げるようになった。

この段階になってちょっとした問題が起こった。古典翻訳塾は前述のように、ある編集者の協力がえられることを前提にはじめたのだが、出版できる翻訳が完成する直前になって突然、その編集者との関係が切れてしまったのである。村井さんの原稿はまだ完成しておらず、したがってまだ渡していなかったため、この件と無関係であるのは確かだが、ではどのような理由があったのか、いまだに分かっていない。世の中にはこういうこともあると考えて、諦めるしかないようだ。

幸い、その後に親しい出版関係者にみすず書房の編集者を紹介していただくことができ、翻訳の検討をお願いした結果、出版が決まった。おそらくそのために、村井章子訳『ミル自伝』ははるかに美しい本になった。そしておそらく、はるかに長く読まれる本になるのではないかと思う。災いが転じて福になったといえる。

そんな問題があったため、古典翻訳塾は残念なことに、第 1 期で中断している。将来、何らかの形で再開できればいいのだが。